

木育のオモテ 1月29日（土）

第2部 体験不足の子どもたちに木育の体験を —今こそ学校に木育を！

コーディネーター： 浅田茂裕（埼玉大学 教授）

出演： 学校の現場関係者のみなさん

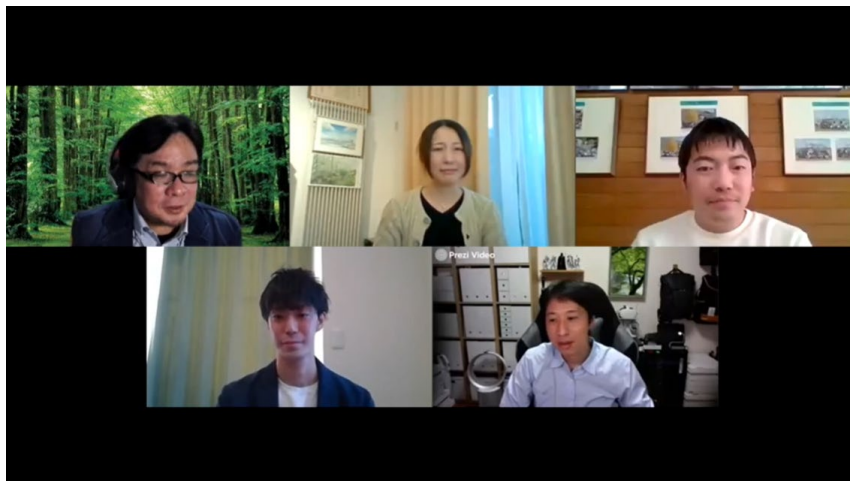
多田先生（流山北小学校）

辻野先生（戸田第一小学校）

石井先生（大宮南小学校）

コメンテーター： 平田 美紗子（林野庁北海道森林管理局）

木育の授業実践を進める小中学校教員を迎え、コロナ禍でさまざまな体験が削られていく学校の現状、そしてそうした中でも木育を通じて体験を提供しようとする取り組みを紹介し、実践者の思いを聞く。



浅田 3人の学校の先生（教え子）に無理やり登壇いただいた。コメンテーターは林野庁職員であり、漫画家、イラストレーターでもある平田美紗子さんをお願いし、いろいろと聞き出していただくことにした。

平田 現場について、森のことについてなど話をしてもピンとこないことがイラストにすると伝わりやすい。必ず伝えようとしているのは、林業は循環産業だということ。本を出版したことで学校ともかかわりができ、授業を行うことも。実際の小学校の現場で木のこと森のことは、どのくらい教えられているんだろうと。モノづくりの中でも森の話まではしていない。学校に森や木のことを伝えるシステムを作りたいと思った時に、何が問題なのかを、現場の先生から現状や本音を聞き出したいと。

理科の学習としての箸づくりプロジェクト

辻野 戸田市の小学校の6年担任。理科に関連付けて木育、環境の話をしている。理科では環境的なことを学ぶのは、座学中心になってしまう。ダイレクトに伝わるようにと、理科で箸づくりを行った。PBL（Project Based Learning）で実社会の問題を自分たちで解決できるか。社会にアプローチして解決する学習スタイル。



今回その中で箸を作るプロジェクトを立ち上げた。いかに木を伐採せずに箸を作るか、という方向になりがちだった。専門家からの学びを入れることで、木材利用を促すために箸を作り地域の方に提供し、森林をどう守るかに着地点が変更した。専門家に話を聞くことで、この変化が起こる。

長く使うために主伐材を使い、塗装もする。箸を使ってもらうことよりもメッセージを伝えることが重要なので、箸袋にメッセージを載せることに時間をかけて作った。森を守るためにはお金が必要。子供が考えると募金となりがちだけど、それは一過性。子どもが作ったから、というのではなく大人が買いたくなるレベルで作るようにと指導した。この箸にどのくらいの経済価値があるのか、というエビデンスまで取りたいと思っている。

ふだんから気にして子どもたちに残したいと思うもの。今の学校は GIGA スクール構想の流れの中にあり、子どもたちはデジタルが当たり前の中で生きている。タブレットを使いこなし、新しいものも生み出していくけれど、わかった気になってしまう傾向にあるので、理

科の中でも実験観察は絶対欠かせない。触れて感じる、本物をどれだけ届けられるかが大事。この箸づくりも木にふれ削って感じたことを地域に伝えていかれるようになるといいなと思っている。

修学旅行、林間学習としての代用体験で木育を

多田 「コロナウイルス感染症拡大の中での木育」。流山市 6 年生の担任。子どもたちにいろいろな夢の種をまきたいと思っている。昨年度は 6 年生の校外学習ができなかったので校内学習を行った。校内を国会議事堂に見立てて、写真を並べたり、バスレクもしたりして体験学習を行った。それを見ていて、5 年生の林間学園も校内でできないかと考えた。様々な工夫をして体験学習のところに木育授業を持ってきた。

そこで浅田先生に依頼して、森についての話、箸づくり、丸太切り、かんなけずり、キーホルダーづくりなどをやった。さらには校庭で七輪を使って空き缶飯盒をやったり、公園にハイキングに行ったりした。令和 3 年もまだコロナの影響があり、日帰りで林間学園を行うことはできたが、本来は 2 泊 3 日。残ってしまう時間を使って昨年同様、事前・事後学習で木育を行った。木の道具を使つての遊びなどを取り入れた。

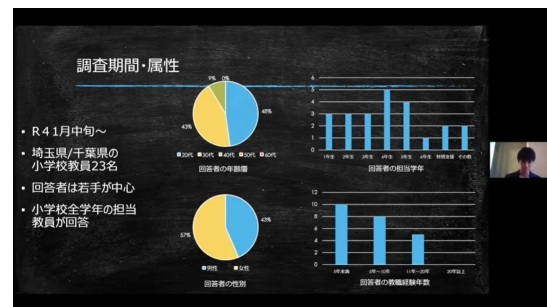


また 6 年生は修学旅行で宿泊ができなかったで、その代わりに時計作りを行う予定。千葉県材の木にこだわって、長く使えるようにムーブメントも国産、さらに卒業制作と記念を兼ねているので校章、校名の入った焼き印も作った。浅田先生にゲストとして来てもらい、製作を行う。

こういう体験学習ができたのは指導できる先生を知っていて、声をかけ、頼れることができた、ということが大きかった。モノづくり、子ども、教えることが好き、という人がいることで成り立った。熱意と条件のクリアが必須だと思う。

木育に対する教員の意識調査についての報告

石井 小学校で木育の実践は広がるのか。今年1月に23人の教員にアンケートを実施した。森林・木材の授業を行ったうち、教材は多くが「教材メーカーからの購入」。産地についてはほとんどが「わからない」。価格は平均で300円。「国産材教材を使いたいか」に対しては61%、「モノづくりなどの体験活学習を実践したいか」は70%だが、実際には導入されている事例は多くない。国産材教材を使いたい理由は「環境学習と関連付けられる」。「特に必要性を感じない」という回答も20%ほど。教材費については300～500円ほどでないと買えない。家庭から教材費を徴収しているのが年間1万くらい。そのほとんどがドリルやテストの購入費。図工の教材費としては2,000円くらいでやりくりしないとイケないとなると、やたらに高い物は買えない。小学校教員の意識としては「木材利用に対して肯定的」が半数以上。でも「森林は伐採せず保護すべき」も25%入るのが現状。木育が広まらない原因、課題は多くの理由について時間数確保ができない、教材研究の時間がない、先生自身に体験がないなど。先生方に関心の高いキーワードはSDGsが圧倒的に高い。あとはごみ問題など身近な問題に関心が高い。



以上のようなことから思うことについて。

学習指導要領の図工のところには表現力を育てることが大切と書いてある。材料については国産材利用に関する記載はない。なので先生にその視点がないのも自然なことかもしれない。

先生は「教えたいことを教える」よりも、指導要領によって指定されている「教えるべきことを教える」というスタンスが多い。何を教えるかはあらかじめ定義されていることが多いので「木育をやりたい」、と自発的になる人が発生しづらい。

木育を取り入れるとしたら図工か社会。木育、国産材利用につながることで社会科には書かれている。この導入で国産材でのモノづくりをするのは理にかなっていると思う。ただ、ものづくりを社会科に取り入れるとなるとコストが高くなる、本来やらなくてよいこととなるので、学年の意向として認められないことが多い。

お金、きっかけ、時間、がないという問題がある。「これを教えたい」よりも「こういう子供を育てたい」という熱意を持つ先生が多いと感じる。このことをふまえて、木育をどう広

めていくのかを考えていく必要があると思う。

平田 辻野先生。専門家の話を聞いてゴールが変わるというのが印象的だった。自分たちで考えてたどり着けるんだと。売り物として作るという先生の熱意が素晴らしいと思った。多田先生。熱意、思いがある先生だからこそ自分の木育に生かそうという心のありようが素敵だと思った。やろうとしたときに指導できる先生を知っているということがあって、先生方だけで頑張るのは無理があるんだなと思った。

石井先生。学校現場について。指導要領以上のことをやるために、木育についてや日本の森林林業の話伝えたいという人たちがつながれるようなシステム作りを、本当は国がやらないといけないのではないか、ということを考えるきっかけになった。

自分の住んでいるところには素敵な森があるということは今後のプライド、誇りにもつながる。教育現場でそういうことを伝えることは木材利用の拡大だけでなく、精神的にも必要なことなのではないかと思った。



浅田 私たちは国産材利用のために木育をすすめなければいけないと思いがちだけど、学校はそうではない。先生たちがやりたいことは「こういう子どもたちを育てたい」ということでそこにフォーカスが当たっている。そこを私たちが理解し、フォローする、積極的に関わっていかなければいけないのだと思う。学校には学校の運動率がある。それをわかったうえで木育を進めていくしかないと思っている。

木育はなぜ広がらない？ どうすればよいのか？

辻野 学校は指導要領に縛られている。私はすき間を縫って木育をねじ込めないと常に考えている。「こういう子どもを育てたい」はあるけれどそのすき間に自分の持っていること、伝えたいことを差し込んでいくことが楽しくてやっている。自分も“変態”なんだなと今回の楽会出演でわかった。

多田 単純に木育自体の周知が広がっていないから、というのはある。日常ではほかのものにも追われていて手が回らない。職員室で勉強の話をしている、木育というキーワードは出てこない。学校にあるビオトープなどにつなげていくとかで広げていくのはありかなと思う。

石井 学校現場が忙しすぎる。学校でやればいいや、と色々な教育がバンバン導入される。そうするとどれも回らなくなってくる。プラス熱意があってやりたいと思う先生の横には全然知識のない先生も存在する。キットを導入する時にも全員が教えられないと使えない、となってしまう。

浅田 地域、家庭から〇〇育が持ち込まれて、もう 500 くらいになっているんじゃないか。それを学校が教えなくてはならなくなる。私たちが学校に持ち込んでしまったものを私たちのような NPO や研究機関が肩代わりする、支援していくことが必要なのではないかと思う。

平田 先生はやっぱりそんなに頑張ってくれているんだ、ということをあらためて思った。そこを肩代わりしていく社会的なシステムとして作っていければよいと思う。

第2部 体験不足の子供達に
木育の体験を
～今こそ学校に木育を!～

350の
「育」がある

辻野先生 戸田市立(埼玉) 6年担任



理科を担当(教科担任制)
「環境」の授業(6年)は
座学になりがち。
→そこでハン作りをさせた。

総合的学習 PBL(課題解決学習)

学校内で40のプロジェクト
ex.

ビジョン

ゴール

木材利用の普及
(ハン作りからハンフワロの
デザインまで)

森林伐採 → 資源・管理
の問題から。

専門化の人の話をきいて
子供達のゴールが変わった。

子供達から「森を守るためにはお金が必要」
募金ではなく、本当に売って
売れる

GIGAスクール構想

- ・デジタルでの授業が中心になってくる。
- ・でもそれでよかった気になるサケシ。
- やっぱり生の体験が

学習指導要領に「木育」が入れば
もっと広がるかも。そして「木育」を知って

- ・お金がない
- ・きっかけもない
- ・準備する時間多い
- ・「木を教えたい」ではなく
「こういう子供を育てたい」で動く

5年生の社会で

夕田先生 流山小学校 6年生



子供達に希望の種をまく!

6年生の校外学習がなくなったので
校内学習

国会ギジ堂の再現体験わった。
5年生の林間学校もなくなっていました。

ハンゴウすいよう等 森 丸太切り体験
ハン作り。

木について学ぶ
キーホルダーやハン作り。

6年生に、千葉県材と国産のムーブメント
を使った卒業作品づくり。

- ・指導できる人を知っていた
- ・声をかけることができた
- ・浅田先生が子供大好きだった

だから
木育が
できた

石井先生 太宮南小学校

つみ木が得意



小学校でアンケート

23名

- ・62%の先生が 森林・木材を活用した授業

教材メーカーから買った
原産国はどこかわからない。

ものづくりを通して、子供達の成長が
みられるので。

60%の先生は
25%。

学校の現場が
いそがしすぎる。

木育に対しての理カは厘んているが、
実センとなると時間や教材が不足している
学習指導要領では目標は

どう教えるかは各先生が何を教えるかは各先生が